ふるさと関ケ原歴史講座　　令和７年７月17日
第３回　　於　関ケ原ふれあいセンター

秀吉による二度の大返しについて
～「中国大返し」と「美濃大返し」～

淡海歴史文化研究所
所長　太田　浩司

はじめに

・羽柴（豊臣）秀吉の天下統一には、さまざまな逸話が伝わる。その中で、「本能寺の変」後（山崎合戦前）の「中国大返し」、それに「賤ヶ岳合戦」前の「美濃大返し」の２度の「大返し」（迅速な帰陣）は有名である。それらが、真実か否かを検証してみる。

Ⅰ　秀吉の「中国大返し」

・天正10年（1582）６月２日朝には、織田信長が明智光秀に急襲され。本能寺で自害する「本能寺の変」が起きる。この時、羽柴秀吉は備中高松城水攻めの最中であった。
・その後、６月13日には、山崎合戦で秀吉は明智光秀を破る。この間、秀吉は尋常ならざるスピードで、備中から畿内へ戻ったとされる。11日（９日）で200キロ余りを駆け抜けたのは「大返し」か。

１）通説の「中国大返し」

・信長の死を知ったのは６月３日夜（４日朝）と言われる、逸話では官兵衛が天下取りのチャンスと秀吉にささやいたとされる。
・毛利側は全体的に兵糧が欠乏しており、高松城主清水宗治の切腹・開城という条件を受諾せざるを得なかった。秀吉は、４日午前、宗治の切腹を確認した。

〔史料１〕「甫庵太閤記」

六月六日未之刻に、高松を引払ひ、沼の城まで帰陣有、折節甚雨疾風に因て所所之大河洪水出しかば、七日は滞留有て、八日至于姫地（路）令帰城にけり、其日は諸卒休息のため、出勢延引有て、九日未明に姫地を立、

・通説である『甫庵太閤記』の記述によれば、①６月６日　備中高松城→沼城（約22キロ）、②６月８日　沼城→姫路城（約81キロ）、③６月９日　姫路城出発、③以降については、諸説一致し問題ない。６月７日は「大河洪水」で動けなかったとする。８日の行程は無理があるか？
・一方、『秀吉事記（惟任謀反記）』は、７日「大雨疾風、数か所大河洪水を凌ぎ」20里を駆けて姫路に至ったと記す。

〔史料２〕『秀吉事記』（惟任謀反記）

六月六日未の刻、備中表を引き、備前の国沼の城に至る、七日、大雨疾風、数か所大河の洪水を凌ぎ、姫路に至ること廿里計、其の日、着陣す、諸卒相揃はずと雖も、九日姫路を立って、昼夜の堺もなく、人馬の息を休めず、尼崎に至る、

・中世の飛脚の速度、1日で100キロと言われる、2日朝の事件を3日夜に知るのは可能、旧日本陸軍は、急を要する時は、速歩・常歩を交互にして1時間に10キロを歩いたと言う。1日に20里＝80キロは不可能ではないが…

2）秀吉によるデマ

・秀吉文書によって、この「大返し」を検証してみよう。

〔史料３〕羽柴秀吉書状案　（天正10年）10月18日付　斎藤玄蕃助等宛
滋賀県立安土城考古博物館蔵文書

（六月）七日、廿七里之所を、一日一夜に播州姫路へ打討入候事、

・斎藤玄蕃助は織田信孝の家臣。6月7日一昼夜かけて、27里ある備中高松から播磨姫路まで行軍したとある。27里＝108キロの距離があるので、これは不可能だろう。この秀吉の主張などが拡大し、「大返し」の伝説となったか？

〔史料４〕羽柴秀吉書状　（天正10年）6月5日付　中川清秀宛　梅林寺文書

只今の殿（野殿）迄打入候之処、御状披見申候、今日成次第、ぬま（沼）迄返申候、古左（古田重然）へも同前候、
…仍只今、京より罷下候者慥申候、　上様（織田信長）幷殿様（織田信忠）何も無御別儀、きりぬけなされ候、ぜゝ（膳所）か埼へ御のきなされ候内ニ…我等も成次第、帰城候条、猶追々可申承候、　偽りの情報

・上記によれば、高松から野殿（岡山市北区）におり、沼城（岡山市東区）へ向かっている最中とある。清水宗治が切腹した6月4日の午後には高松を出発し、5日には沼城に到着したのが真実か。この間は約21キロなので可能。中川清秀に対して信長・信忠親子が無事で、近江に逃れたという偽情報を拡散し、自身の優位性を示す情報操作を行なっている。

3）秀長家臣の姫路到着報告

・羽柴秀長家臣の杉若無心（越前国出身、朝倉氏の旧臣という）による秀吉の行動を記した文書が残る。宛名の松井康之は、信長の家臣から細川家の家臣になった人物。

〔史料５〕杉若無心書状　（天正10年）６月８日付　松井猪介（康之）宛

『松井家譜』

西国表之儀存分之まゝ、両川（吉川元春・小早川隆景）人質定ふ（丈夫）ニ相定、三ヶ国被相渡、去六日ニ至姫路、秀吉馬被納候、長秀ニ別而御しゆこん（入魂）之義間、万事そりやく（疎略）不被存候、…明九日悉出陣ニ候、

播磨 備中 備前

羽柴 秀長のこと

事実の可能性が高い

・本書では６日には秀吉軍が姫路に到着したとある。５日の内に沼城を出て６日には姫路に着いたと見るべきで、この間の約81キロは２日あれば可能と見られる。（7日,8日休養）

・その後は、６月９日　明石着（約34キロ）、６月10日　兵庫着（約23キロ）、６月11日　尼崎着（約23キロ）、６月12日　摂津富田（約13キロ）、富田は小高く淀川も流れ拠点、６月13日　山崎合戦（約10キロ）、これらは通常のスピード。

４）秀吉は信長の「御座所」を利用か

・秀吉は信長の「御座所」を活用し大返しを実現したという説が出されている。兵庫城（神戸市兵庫区）から発掘された二つの門が根拠になっている。

・「洛中洛外図屏風」に描かれた「室町殿」の状況からして、二つの門は織田信長を迎えるための門で「御座所」の証拠とする。「大返し」の経路上に複数の「御座所」を秀吉が設けていて、それを活用したから、秀吉は大返しできたとする説。

・兵庫城の話のみで、秀吉の「御座所」利用を説明するのは無理がある。

５）「中国大返し」まとめ

・備中高松城から山崎合戦場まで、約200キロ余りある。これを、11日（９日）の間で大返し。急行軍と言えば、そうだが…

・姫路で３日程休息など、秀吉は慎重な行軍をしている。「大返し」と言えるような行軍か？〔史料３〕にある27里を１日でかけたという話が肥大化して、「中国大返し」の虚像が成立したのではないか？

Ⅱ　秀吉の「美濃大返し」

・天正11年（1583）３月中旬から、４月20日・21日の賤ヶ岳合戦まで、羽柴秀吉と柴田勝家軍は、近江国伊香郡余呉湖周辺で多数の城砦を築きあい対峙する。

・この合戦の本質は、秀吉方の陣城である堂木山城と東野山城の間の北国街道に築かれた〔史料６〕に見える「惣構」（土塁と堀）をめぐる攻防であった。突破したい柴田軍と、防御したい羽柴軍の攻防。

・４月16日には岐阜城で再起した柴田勝家側の織田信孝を攻撃するため、北国街道を通って美濃国に至る。洪水で揖斐川・長良川が渡れず、大垣城に留まっていた。

１）大岩山陥落に至る経緯

・4月20日未明、柴田勝家の重臣・佐久間盛政が秀吉側の第二線の大岩山砦を攻撃して、守将の中川清秀を討死させている。あくまで「惣構」の突破を目指してきた柴田軍の戦略の転換であった。

・両軍対峙の状況にしびれを切らし、「中入」の戦略を敢行した柴田軍の判断は、〔史料6〕に言うごとく、「ふりニつま」った行動と言えよう。

〔史料6〕羽柴秀吉書状　（天正11年）4月3日付　羽柴秀長宛
長浜市長浜城歴史博物館蔵

【①・②省略】

③一、**惣構の堀より外へ**鉄砲放候事ハ不及申、」草かりふせいに至まて、一人も出され間敷候事、

④一、敵ハ今度たゝきつめられ、失面目候て、国もとへ」人数可入よう無之付而、**ふりニつまりよそへの」外聞と存、**陣取をよせ候敵に候条、一人も」足軽を出し不申候者、弥ふり二つまり可申事、

⑤一、敵を五日・十日間陣取せ、それよりも敵之もやうさけ」すみ候て、ゆうゆうと可及行候、**我等播州へ人数」を打入候て、於彼国其方より注進聞届、姫路を」可罷立日数と可被存候、**殊あちニ秀吉逗留」内罷出候義ハ不慮にて候、惣人数相そろう儀、播州」より俄にかけ候よりもはやく人数揃可申候ハヽ、満」足此事候、

→柴田軍を動かす陽動作戦

【⑥・⑦中略】

卯月三日　　秀吉（花押）

美濃守殿

4月16日秀吉は美濃へ移動
17日，18日は大雨のため大垣城に

2）大岩山城陥落の真相（4月20日午前中に）

・佐久間軍に攻撃された大岩山城陥落については、「兼見卿記」や「多聞院日記」に中川清秀の他600余人が討死、秀吉軍の砦が4つ（大岩山城・岩崎山城・賤ヶ岳城、あと1つは不明）まで柴田軍に取られたとある。

・合戦直後に編纂され、軍記物としては比較的信憑性が高い大村由己著「柴田合戦記」（「秀吉事記」）が多くを語る。

〔史料7〕「兼見卿記」4月20日条

江州北郡及一戦中川世（瀬）兵衛尉（清秀）討死云々、追々沙汰、弥治定也、

〔史料8〕「多聞院日記」4月22日条

去十九日（二十日の誤）、於江州北郡及一戦摂州清（瀬）兵衛討死、人数六百余損、城四ツ柴田方へ取云々、

〔史料9〕「柴田合戦記」（「秀吉事記」（「柴田合戦記」）

然るに、柴田勝家は、信孝御謀反に力を得、天下を取るべき事、勿論なり、旧冬、勝家

一味の時、救ひをなし奉らざり無念、今此の刻、急度一戦に及ぶべし、幸ひ、唯今秀吉濃州に赴くの条、其の透（すき）に、先づ、此の表を打ち破るべきと、かの謀反人山路将監を案内者となし、敵の行（てだて）、陣取りの様子、悉く尋ね探り、天正十一年卯月廿日佐久間玄蕃助を大将として、余呉の海の馬の手を通り、志津ヶ嶽に手当を置き、中川瀬兵衛尉清秀が陣取るところの尾崎に押し寄せたり、柴田父子は同木山・左禰山の襲ひとして、近々人数を立ち寄するものなり、

清秀は、…詞を諸卒に懸け、一千余騎、塁を離れて衝きて出づ、玄蕃が兵、これを見て、余さず、漏さず、乙取籠め、数剋攻め戦ふ、清秀…追い立て、一旦、勝利を得ると雖も、敵は多勢を以て、手負死人を顧みず、風の発するが如く、河の決するが如く、乱れ入りて、終に清秀討死す、其の時、玄蕃助、勝に乗じて太刀場を取る、…此の時、速やかに引き取るにおいては、一段勝手たるべきところに、勢ひに因つてこれを破り、其の儘居陣するところなり、秀長の陣所を始め、先手の陣取り、各堅固の備へなり、

・その中で、伊香郡下余呉村の中川組 12 軒（現在は 9 軒）が、討ち死にした清秀の遺骸を東山（北国街道を隔てた東の山）まで運んだ上、七昼夜守護し、その後大岩山に清秀遺骸を持ち帰り、埋葬したという伝承を持つ。最近までこの中川組では近世に中川家が藩主となった豊後岡藩（大分県竹田市）から下賜された清秀像をまつり、その供養を続けていた。

3）「美濃大返し」の真相

・秀吉は〔史料 6〕で播磨（姫路）に行くと言っており、美濃国大垣に至ったのも、柴田側の攻撃を誘うための陽動作戦か？

・大村由己著「柴田合戦記」によれば、大岩山の陥落は巳刻（午前 10 時頃）、それを聞いた秀吉は申刻（午後 4 時頃）に大垣を発って、戌刻（戌刻は午後 8 時頃だが、同書に 13 里（約 52 キロ）を二時（ふたとき）半で駆け抜けたとあるので、通常は戌下刻＝午後 9 時頃と考えられている）には、木之本に戻ったとする。可能な移動

・あるいは、『太閤記』の記述に従い、申の下刻（午後 5 時頃）に立って、亥刻（午後 10 時頃）に木之本に到着したと解するか。

〔史料 9〕「柴田合戦記」（「秀吉事記」）

然して、江北の師（いくさ）相果つる事、巳の剋、それより羽檄（うげき）を以て、件々注進あり、秀吉これを聞き、清秀討るるの条、哀憐もつとも深し、さりながら、此の間、柴田一戦に及ばんと欲し、節所に引籠り、行を蔵（かく）すの条、力なく数日を送る、今や勝に乗って出張す、屯（たむろ）をなさざる以前に切り懸かり、討ち果たすべき事、掌中にあり、天下の雌雄、此の節なり、飛竜に鞭を添えて走らしむ、軍卒の面々、逸馬蹄を双べ、続いて進む、垂井・関ヶ原・藤川、早路、逸足にて、伊

吹山の麓を過ぐるに、馬を乗り殺し、歩兵息を切りて死する者多し、已に夕日西に傾き、…小谷の宿にて夜陰に及ぶ、**申の剋に大垣を立ち、戌の剋木ノ本に着陣す、三十六町の路十三里、二時半に懸け着く事、古今希有の働きなり、**

これに依って、相随ひて粮を運ぶものなし、人馬の飢疲を察し、道終（みちすがら）、村々里々に飛脚を以て、触れ遣はす、**秀吉今夜の曙一戦に及ぶべきの条、家一間より**

お米のこと

八木一升炊（かし）いで、餉（かれいひ）となし、木之本に持ち来たるべし、其の恩賞を、忘れず、相計らふべき由、方々告げ送るの間、或は二里三里、或は五里六里これを運ぶ、特に長浜は秀吉旧居の地なり、これに依つて、鼎鐺（なべ）に五合を陣に容るるの輩も亦、これを贈る、野人恵みに懐くの故なり、木ノ本において、諸卒悉く疲れを直す、

・秀吉は大垣から木之本までの大返しに当たり、兵士の食糧を木之本まで運ぶよう、湖北の村々に指示したとある。特に、長浜町は秀吉の城下町であっただけに、積極的にこの命に協力したと読むことができる。く正しいと考える

〔史料10〕「甫庵太閤記」

申下刻に大柿を出、汗馬の鞭隙なく急ぎにけり、秀吉事他急ぎ給へ共、多勢なれば、思ふ程にははかも行ざりしが、藤川辺にては、はや夕日山のはにちかく、次第に闇く成と等しく、地下人百姓共、手々に松明をともしつれ、御迎の者也と声々に名のりしかば、其名を覚る事はなるまじきぞ、其郡其里と能覚候へ、一かどはうびすべきぞと、自も宣ひ、多は歩立（かちだち）の者を以仰けり、長浜近辺之町人百姓等、酒飯赤飯馬の飼など持出、**一村々々備へまうけさゝげしかば、**餅を手づから取て、褒美し給ひし事あまたたびなり、人馬力を得一きはいかめしめやかに其勢甚以夥し、**嶺より峰わきへ松明をともし立、万灯会も物かはなれば、**秀吉卿当地参陣やらん、松明のかず莫大なり

・沿道に百姓等が松明をともし、長浜近辺の町人・百姓等が酒食赤飯・馬の餌をも持って、大垣から帰る将兵をもてなしたとある。

・合戦直後に記された「秀吉事記（柴田合戦記）」では、食糧を木之本まで運ぶことのみが記されていたのに、近世前期に成立した『太閤記』では、沿道における百姓による松明用意・食糧補給の話に転化されている。『太閤記』の記述は、秀吉の偉業を顕彰する脚色が甚だしいと見られる。

4）「美濃大返し」まとめ

・13里（52キロ）を二時半（5時間）で駆け抜けたとするれば「大返し」と言えるか。賤ヶ岳合戦の全体的な推移を考えれば。「中国大返し」より、「美濃大返し」は現実性・真実性がある。